

特集Ⅱ 十周年シンポジウム

公開シンポジウム「地域課題への挑戦」

―田中正造翁の谷中村における活動の現代における意義―

谷中村の遺跡を守る会会長 高 際 澄 雄

田中正造翁の予言能力

予防原則の原型

1 富国強兵・殖産興業の問題点

足尾銅山問題に取り組むことによって気づく

日清戦争と渡良瀬川洪水と鉱毒の激甚化

日露戦争反対 日露戦争勃発前に不戦論を展開
軍備全廃の主張 「予はこの天理において戦うものにて、倒れてもやまざるは我が道なり。天理を理解しこの道実践のもの宇宙の大多数をえば、すなわち勝利の大いなるものなり。道は二途あり殺伐をもってせるを野獣の戦いとし、天理をもってせるを人類とする。人類は天理をもってせるものなり」。

病床で太平洋戦争での日本の敗戦を予言

「おれの病気問題は片づきましたが、どうもこの日本の打ち壊しというものはひどいもので、国が四つあっても五つあっても足りることではない。」

文明の問題 「真の文明は 山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」

(1912年6月17日日記)

勝海舟と同じ立場 「旧幕は野蛮で今日は文明だそうだと。……旧幕は、野蛮だと言うなら、それでよろしい。伊藤さんや陸奥さんは、文明の骨頂だと言うじゃないか。文明というのは、よく理を考えて、民の害とならぬ事をするのではないか。それだから、文明流になさいと言うのだ。」

徳川幕府の環境政策の世界的位置

「指導者たちが、受動的な策ばかり採らず、危機を予測して早めの行動に乗り出す勇気を持

ち、鋭い観察によって“上から下へ”の管理を実行に移すことができる。徳川家の将軍たちと、わたしの友人でもあるモンタナ州テラー動物保護区に関わる地主たちは、みずからの長期的な目標に加えて、その他おおぜいの利益をも追求しているという点で、それぞれの管理方式の最高の範例といえるだろう。」

ジャレッド・ダイヤモンド『文明崩壊』第9章
谷中村廃村反対 谷中村復活運動 日本の再生
「日露戦争たけなわの時にあたりて国家の基礎団体たる町村を破壊することを為す。すなわち谷中村は日露戦争に際して無法に自治体を破壊されたるなり」

「谷中村が全く亡びなば、そは政府の非道が成功した訳なればこれが成功する様では日本は非道なり無政府なり。谷中村の滅びるのはつまり日本国の亡びると同じわけなり。谷中村を亡ばして国が存在していると思うのは間違いなり...谷中村亡びしは即政府の亡びし証拠なれば、政府亡びて谷中村亡ぶ。」

2 渡良瀬遊水地の問題点

正造翁の治水論

「もし夫地形に背き山脈に連なる岡と台とを掘割り、新たに河川流域を造り、流量を分水せんとするよりは、むしろ古き川筋の地勢を復するの穏当なるに如かず。渡良せ川南流せしめて旧二復し、利根川は葛和田の辺より、荒川は熊谷の東方より吹上の北方なる古荒川の旧川筋に分水して共に中川に注がしめ、その設備のため多少の工費を以てせるハ之れ治水の本義に近かしとす。若し夫関宿の石堤を払へ中利根川の入口

開き其他数ヶ所の妨害を除かば、平水尺余を減じ洪水丈余を減じ、改修の必用殆んど其半ニ達せんなり。」

足で歩いた結論 明治44年 下野治水要道会を設立

ほとんど独力で県内の水害の歴史を調査 問題点を明らかにする

カスリーン台風による被害 栗橋の東で堤防決壊 古利根川沿いに流下

埼玉東京で被害が多くなる 死者1100人
遊水地堤防も決壊 周辺地の死者26人

3 環境問題

自然の恵みを大切にす 谷中村は年間16-7万円の収入

（3年に1度の洪水 洪水の無い年は20数万円に達する）

「それ谷中村の地勢たるすこぶる水利に富み、かつ天与の肥沃地たるにおいては日本無比、関東の第一位なり。もし政府の悪干渉を除かば、天は即ち人民と協力して忽ち天下無比の一大美村を作り出して、社会の公益を増進するや毫も疑いなし。」（『谷中村滅亡史』序文）

体を病む理由 庭田邸にて8月13日

「この正造はな.....天地と共に生きるものである。天地が減れば正造もまた減びざるをえない。今度この正造が斃れたのは、安蘇、足利の山川が減びたからだ——日本も至るところ同様だが——。ゆえに見舞いに来てくれる諸君が、本当に正造の病気を治したいという心があるならば、まずもってこの破れた安蘇、足利の山川を回復することに努めるがよい。そうすれば

正造の病気は明日にもなおる...。」（島田宗三『田中正造翁余録』下第十一章）

赤麻沼の問題

「...この土地を保護する堤防復旧のため二百四十八万円という土木費を支出せる県経済の奇怪を見たのは、即ち関宿堰堤による利根川逆流のためである。」

と、いちいちその実例をあげ、更に遊水池の有無無益、藤岡高台開鑿の無謀、関宿堰堤取り払いの急、公益、天然、憲法、町村自治権等の擁護の緊急、赤麻沼は渡良瀬川改修に関係のない事実および沼の収益とその価格等に関し、数十年の経験と遠大な見識のもとづき、約二時間にわたって、きわめて厳粛な、政談というよりはむしろ学術的な大演説をされた。」

「この頃、政府は経費節減のため、渡良瀬川改修工事繰り延べを内定したと伝えられた。

翁は、渡良瀬川改修工事は関東五州に至大の関係があり、殊に下都賀南部危急存亡の事業であるから当局の内定通り繰延てもらいたいという陳情書の簡単な原稿を認めなさい、といわれるので、筆者が起草すると、翁は自ら修正加除を施し、これを至急清書して赤麻村をはじめ各関係町村連署の上、原内務大臣へ提出させる手筈であった。これは、たとえ一時的にせよ遊水池を遅らせ、そのうちに良き解決を求めようとする翁の決意から出たものであった。」

（島田宗三『田中正造翁余録』下第九章）

藤岡台地を掘削して渡良瀬川を赤麻沼に流し込むことにより、正造翁の予言通り、北部のすべての沼が消失した。

公開シンポジウム「地域課題への挑戦」 田中正造翁の谷中村における活動の 現代における意義

2017年7月4日午後1時30分ー 4 時
於宇都宮大学大学会館多目的ホール
谷中村の遺跡を守る会会長 高際澄雄

田中正造翁の予言能力

現代でいう予防原則の原型

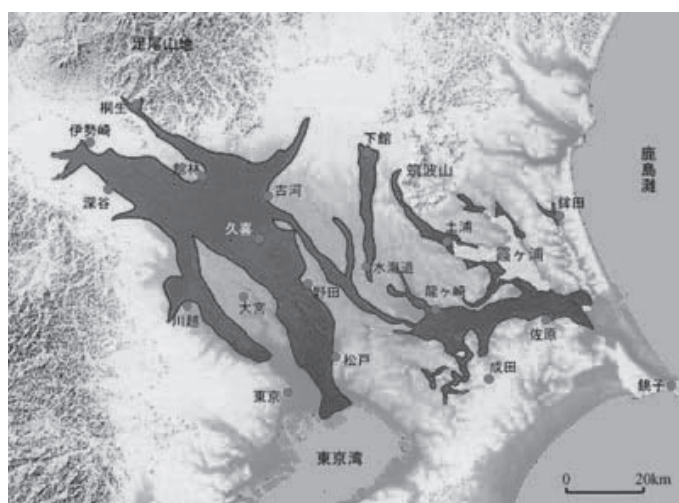
予言は、田中翁の活動や調査によって得られた合理的結論

明治政府の光と影

光 日本近代化を進める

影 欧米化の帝国主義、植民地主義の極端化

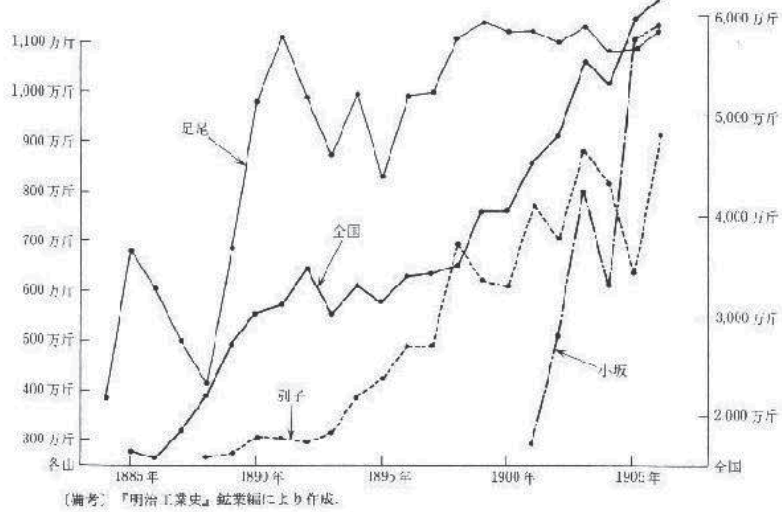
(インドやオーストラリアなどは今でもCommonwealth Gamesに参加しているが、日本の大東亜共栄圏構想は今でも中国や韓国、北朝鮮に認められていない)



明治43年の利根川の洪水 (かわさき市民アカデミーHP)



第10図 全国および主要3山産銅量推移



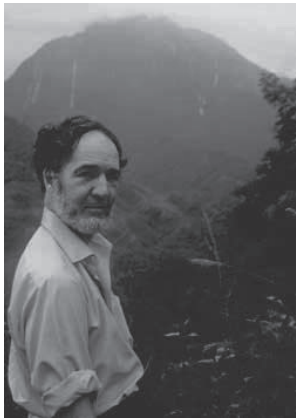
利根川の東遷

- 江戸時代以前、渡良瀬川は太日川と呼ばれ、利根川とは独立した川であった。
- 利根川は、それまで江戸湾（現東京湾）に流入する川であった。
- 徳川家康が豊臣秀吉により関東に移された結果、江戸を建設し、関東平野を開拓するために、利根川の東遷事業が開始された。

田中正造翁の最期となった庭田家の部屋 庭田隆次さん







ダイヤモンド



ドイツの森



木曽の檜林



カスリーン台風被害の予言

「もし夫地形に背き山脈に連なる岡と台とを掘割り、新たに河川流域を造り、流量を分水せんとするよりは、むしろ古き川筋の地勢を復するの穩当なるに如かず。渡良せ川南流せしめて旧二復し、利根川は葛和田の辺より、荒川は熊谷の東方より吹上の北方なる古荒川の旧川筋に分水して共に中川に注がしめ、その設備のため多少の工費を以てせるハ之れ治水の本義に近かしとす。若し夫関宿の石堤を払へ中利根川の入口開き其他数ヶ所の妨害を除かバ、平水尺余を減じ洪水丈余を減じ、改修の必用殆んど其半ニ達せんなり。」（田中正造「治水論考」（布川上掲書p. 162から再引用））

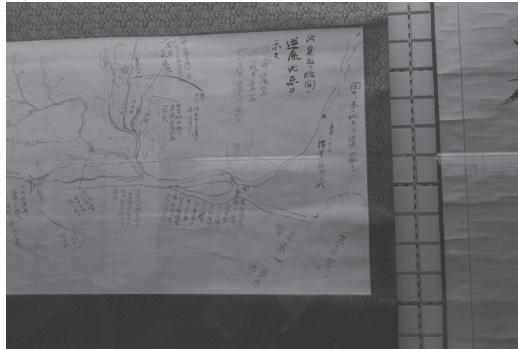
死者 1077名 行方不明 853名

渡良瀬遊水地周辺 元の渡良瀬川筋を洪水逆流 死者25名



田中正造の治水案

- 田中正造は谷中村の貯水池化に反対して、古利根川の復活と江戸川の流量拡大を主張



カスリーン台風による決壊

- 1947年（昭和22年）9月
- 利根川の栗橋右岸堤防が決壊
- 古利根川を伝って東京まで洪水が押し寄せる
- 死者1100人
- 渡良瀬遊水地堤防も決壊
- 死者26人

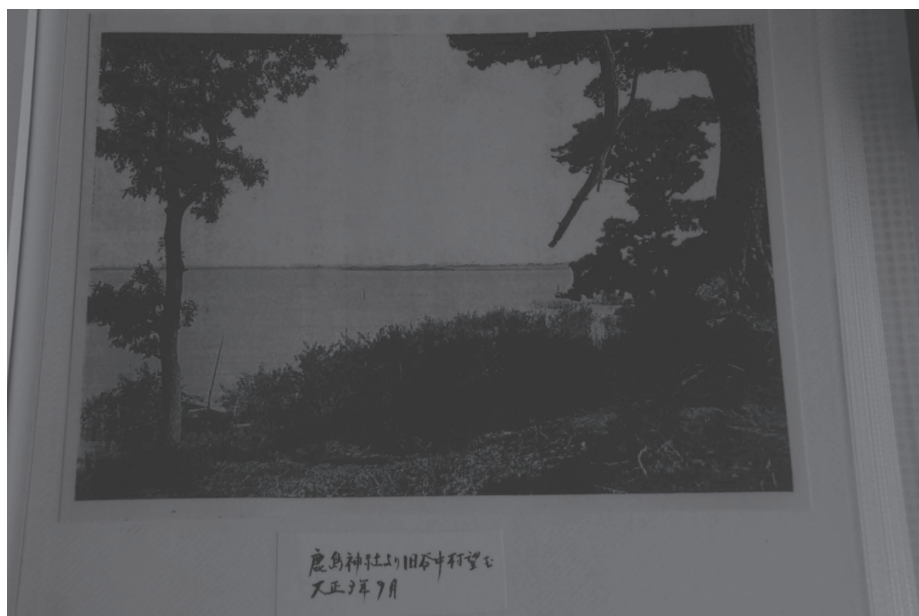


田中正造のもう一つの予言

- 自然の恵みを利用しながら生活することの大切さの認識
- 谷中村の豊かさの認識
- 赤麻沼の消滅と赤麻村への打撃
- 渡良瀬川を谷中村に流入することで打撃は谷中村だけではない
- 谷中村に隣接して北部に多くの沼があった
- これらの沼は淡水漁業により豊かな収入をもたらした
- 渡良瀬川流入後に赤麻沼は消失し、淡水漁業は大打撃を受けた

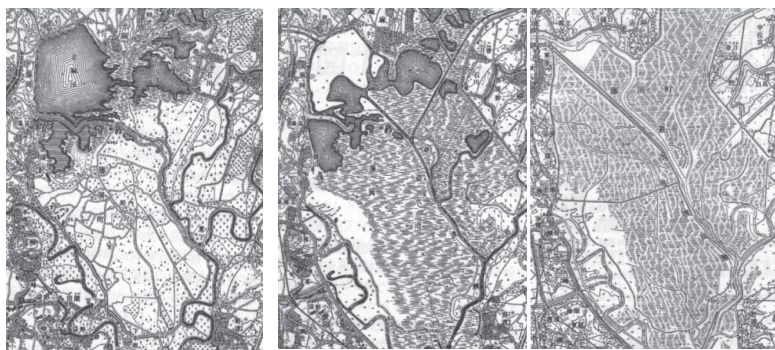






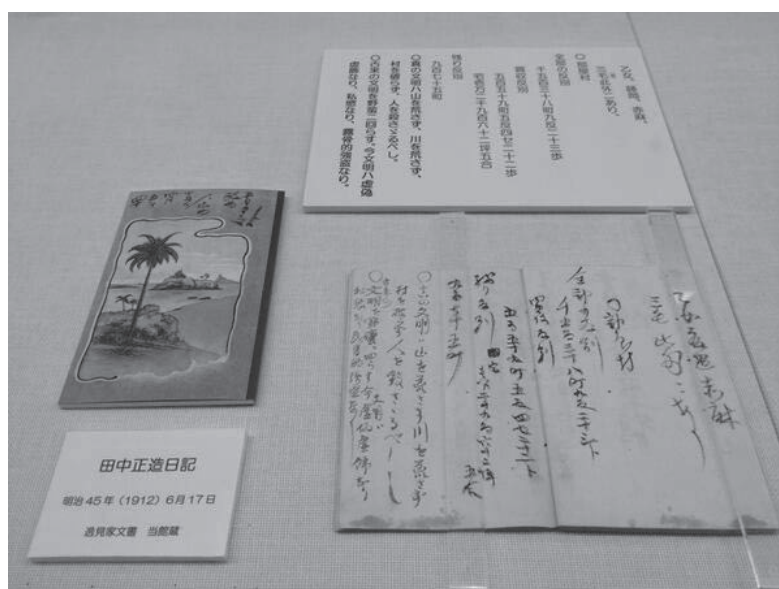


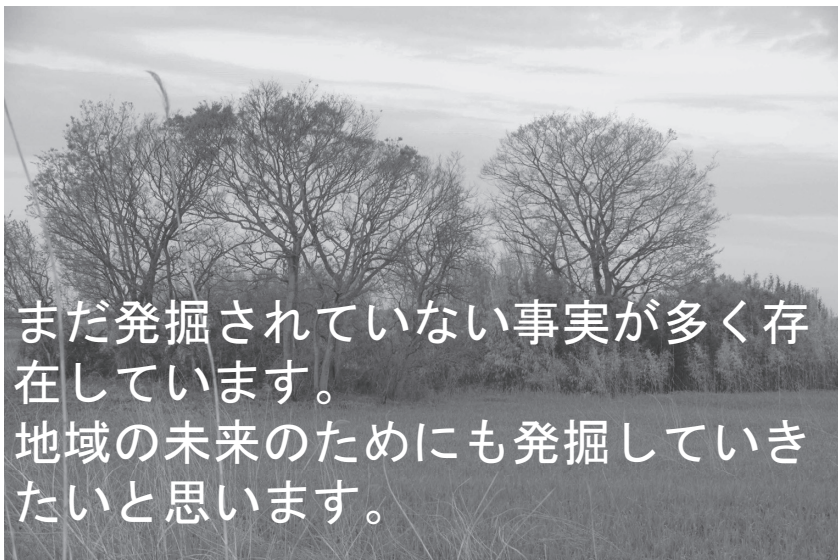
掘削された藤岡台地 パナマ運河以上の工事だった



渡良瀬遊水池の移り変わり 沼の消失

1906年(明治40年) 1929年(昭和4年) 1968年(昭和43年)





宇都宮大学 国際学部附属 多文化公共圏センター 10周年記念



公開シンポジウム 「地域課題への挑戦」

キーワード

多文化共生、高校進学、進路の自己決定、
地域特性の理解、予防原則

日 時

2017年7月5日(水)
13:00から16:30

会 場

宇都宮大学 キャンパス
大学会館2階 多目的ホール

タイムスケジュール

13:00～ 開会挨拶(学長 石田朋靖、センター長 田巻松雄)
講演Ⅰ(高際澄雄)

「田中正造翁の谷中村における活動の
現代における意義」

～14:20 質疑応答

14:30～ 講演Ⅱ(宮島喬)

「外国人の子どもたちに更なる教育の
機会を一貫の多文化共生のために」

ディスカッション(高際、宮島、進行:田巻)

～16:30 閉会挨拶(国際学部長 佐々木一隆)

Profile

みやじま たかし

宮 島 喬

お茶の水女子大学名誉教授

- 「現代ヨーロッパと移民問題の原点—1970、80年代、開かれたシティズンシップの生成と試練」明石書店、2016年
- 「多文化であることは——新しい市民社会の条件」岩波現代全書、2014年
- 「外国人の子どもの教育」東大出版会、2005年
- 「外国人の子ども白書 権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から」編者、明石書店、2017年

Profile

たかぎわ すみお

高 際 澄 雄

宇都宮大学国際学部名誉教授

- 「ワントリーの竜」における詩と音楽」、『宇都宮大学国際学部研究論集』第37号、pp.13-28、2014年
- 「18世紀イギリス公共圏の一特徴—日本における公共圏構築のための考察」、『宇都宮大学国際学部多文化公共圏センター年報』第3号、pp.4-9、2011年
- 田中正造没後100年記念「田中正造とアジア」スタディーツアー、シンポジウムの開催、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター主催、2013年12月

Profile

たまき まつお

田 巻 松 雄

宇都宮大学国際学部教授、
国際学部附属多文化公共圏センター長

- 「タ張は何を語るか—炭鉱(やま)の歴史と人々の暮らし」田巻松雄 編・タ張の歴史と文化を学ぶ会 協力、吉田書店、2013年
- 「地域のグローバル化にどのように向き合うか—外国人児童生徒教育問題を中心に—」(宇都宮大学国際学部国際学叢書)下野新聞社、2014年
- 「越境するベルー人:外国人労働者、日本で成長した若者、[帰国]した子どもたち」(編、宇都宮大学国際学部国際学叢書)下野新聞社、2015年
- 「未来を拓くあなたへ[共に生きる社会]を考えるための10章」下野新聞社、2017年

主 催

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

電話: 028-649-5228 E-mail: tabunka-c@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp